



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	『星の王子さま』のひとつの読み
Author(s)	木谷 吉克(Yoshikatsu Kitani)
Citation	研究紀要（SHOIN REVIEW），第 35 号：15-39
Issue Date	1994
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

『星の王子さま』のひとつの読み

木 谷 吉 克

『星の王子さま』はひと筋縄では行かない難解な作品である。はじめてこの書を訳書で読んだときには、いったいこの物語をどのようにとらえたらよいのかまるでわからなかった。そうした場合のつねとして、「あとがき」のなかに、なにか読み方のひとつの指針なりと見出そうと読んではみたものの、もうひとつ説得力がない。「この童話をかいたサン＝テグジュペリのねらいは、つまるところ、おとなというおとなに、かつての子どもごろころを取りもどさせて、この世の中をもっと息苦しくないものにしようとしたところにあるのでしょうか。あるいは、いつまでも子どもごろころを失わずにいるおとなこそ、ほんとうのおとなであることを、子どもにも、おとなにも知らせようとしたところにあるのでしょうか⁽¹⁾」といったことばを読んでも、なにか作品の本質とは、ずれているという思いしか受けなかった。たしかにこの書には、おとな批判があり、社会批判があるし、それに対抗しての、子どもごろころの称揚がある。しかし、それだけではかたづけられない豊かな内容がもりこまれているように思われたからである。

その後、原文でこの作品を何度も読み返し、サン＝テグジュペリの他の作品にも親しむにつれて、この書が、サン＝テグジュペリの他の作品と本質的に変わるところのない問題をとりあつかっていることに、しだいに気づいてきた。それとともに、子どもごろころの純真さといった観点からのみこの物語を見る見方の不備をもしだいに感ずるようになってきた。その意味で、塚崎幹夫氏の次のようなことばに私は同感するものである。

魔法のつえでもあるかのように、「子供」とか「童心」というようなことばを唱えてさえおれば、この作品に関することは何でも解けるかのような信仰

が流行している。しかし、だまされてはならない。この迷信のために、『星の王子さま』は、たしかに他の文学作品に比べて格段に多くの読者を獲得するに至っているが、その読みはきわめて浅く甘いものにとどまっていると思う。重要だと思われる問題を簡単に見逃してしまう原因にさえなっている。今後の『星の王子さま』研究は、「子供」とか「童心」というようなあいまいなことばを、追放するところから始めるべきだと提案したいほどである。⁽²⁾

塚崎氏と同様、私も『星の王子さま』の人気はある種の誤解のうえに成り立っていると考えている。この誤解のひとつの原因に、多くの読者が、翻訳でこの作品と親しんでいるという事実があるのではないかと思う。内藤濯氏の訳はたしかに名訳ではあるが、この作品を解くカギともいえる《apprivoiser》「飼いならす」とか《responsable》「責任がある」といったことばをいろいろに訳しかえているせいで、読者にはその語の重要さがともすれば見逃されることにもなるからである。「飼いならす」という語は、そのまま日本語のなかに移せば、少々奇異な感を与えるだろうし、「責任がある」も、いかにも重すぎるという気がしないでもない。また、なによりこの物語が、子どもを対象にしたものであるということから、いろいろと苦心された結果のことだろうと思う。翻訳としてはそのほうが成功しているだろうとは思うものの、ただ、そのために、この作品の真意がよりつかみにくくなっていることを残念に思うだけである。

以下に、『星の王子さま』を私がどう読んだかを、できるかぎり物語の流れにそって述べてゆこうと思う。作品からの引用は、内藤氏の訳をそのまま使わせていただくが、原文からの直訳を示しておいたほうがよいと判断した場合には、かつこのなかにそれを補っておいた。

1 ぼうしのようなウワバミの絵

『星の王子さま』は語り手が6歳のときに見たウワバミの絵の話から始まる。それは1ぴきのけものをのみこもうとしているウワバミの絵で、この絵の解説として「ウワバミというものは、そのえじきをかまずに、まるごと、ペロリと

のみこむ。すると、もう動けなくなって、半年のあいだ、ねむっているが、そのあいだに、のみこんだけものが、腹のなかでこなれるのである」と書かれてあった。6歳の語り手は、その絵に触発されて、自分でもウワバミの絵をかいてみる。それはウワバミがのみこんだゾウをこなしている絵で、自分でも傑作だと思ってそれをおとなたちに見せる。しかしおとなたちはその絵をウワバミとは見ずにぼうしと見る。そこで語り手は、これならわかってくれるだろうと思って、ウワバミのなかのゾウをかいておとなたちに見せる。しかしおとなたちは、それには興味を示さずに、そんなウワバミの絵などやめにして、地理や歴史や算数や文法に精を出すよう忠告する。傑作だと思った自分の絵が、こんなふうに冷たくあしらわれて、語り手は自分には絵の才能がないんだと落胆し、絵かきになることをあきらめる。そこで飛行機の操縦をおぼえて飛行士になる。

このぼうしのようなウワバミの絵は、あとに出てくるキツネの教え、「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない」「かんじんなことは、目に見えない」という教えと当然関係する。語り手はその後、「ものわかりのよさそうな人に出くわすと」いつも手もとに持っていたこの絵を相手に見せる。その人が「ほんとうにものわかる人かどうか、知りたかった」からだと言っている。語り手にとって、この絵は、相手が心で見る目を持っている人かどうかを測る試金石のようなものとなる。しかし返ってくる答えはいつも「ぼうし」で、それを聞くと、語り手は、自分がほんとうにしたい話はやめにして、相手と話をあわせるために、ブリッジやゴルフや政治やネクタイの話をする。すると相手は「こいつあ、ものわかりのよい人間だ」と言って、たいそう満足する。ところが、語り手にとっては、相手はすこしものわかりのよい人間ではないのである。

というわけで、語り手はほんとうに心を割って話のできる人にはめぐりあわずに過ごしてきた。語り手自身、「親身になって話をするあいてが、まるきり見つからずに、ひとりきりで暮らしてきました」と言っている。

ところが6年前のこと、飛行機が故障してサハラ砂漠に不時着したとき、語り手は王子さまと出会う。王子さまの「ヒツジの絵をかいて」という求めに、語り手はヒツジの絵などかいたことがなかったので、自分のかける例のぼうし

のようなウワバミの絵をかくて見せる。すると王子さまはすぐにそれがウワバミにのまれているゾウの絵だと見ぬく。語り手はあっけにとられる。

この話は、王子さまがウワバミの内側を見る目を持っていること、つまり、心で見る目を持っていることの例証になる。心で見る目といってもなにも神秘的で超能力のような能力のことではない。ひとつの絵を理解するとは、その絵にこめられた意味や心を理解することである。その絵をかくた人がそれにこめた意味を理解することであり、その人がどういう心からそれをかくたかを理解することである。だからその絵をかくた人のことをよく理解している人は、その人のかくた絵もよく理解できる。しかしその人のことをほとんど知らない場合でも、その人のかくた絵を理解できる場合もある。それは絵を見る人のものの見方が、その絵をかくた人のものの見方に近い場合である。王子さまと語り手はそのような関係にあったと言える。王子さまは語り手にまだ出会ったばかりである。しかし、これまでだれも理解したことのないウワバミの絵をひと目で見ぬいてしまった。ということは、王子さまのものの見方が、語り手のものの見方にとても近いということが当然予想される。とにかく、語り手は、ここではじめてもののわかる相手に出会ったことになる。親身になって話のできる相手に出会ったことになる。

語り手はこの絵をどういう心からかくたのか。6歳のときに見たウワバミの絵は、ウワバミがトラのようなけものを今まさにのみこもうとしている絵であった。その絵とその絵につけられた解説を読んで、語り手は「ぼくは、それを読んで、ジャングルのなかでは、いったい、どんなことがおこるのだろうと、いろいろ考えてみました」と書いている。ウワバミとその解説文は、語り手に強い印象を与えたことがわかる。その絵は、語り手がそれまで思いもしなかったこの世界の非情な真実、弱肉強食の事実を教えたのだろうと思う。おそらく、それまでこの世界は平和で、のどかで、優しさにみちたものと思っていた語り手は、実際は自分の知らないところで、いろいろと残酷なドラマが日々くりかえされているのだということを知った。それは子どもごろに大きなショックだったであろう。語り手が自分もウワバミの絵をかくてみようと思ったのは、そういう心の衝撃、心の興奮につき動かされてのことである。

ところで、語り手のかいた絵は、けものをのみこもうとしているウワバミの絵ではなく、のみこんだあと、のみこんだけものをこなすために眠っているウワバミの絵であった。それは、例の絵の解説の後半の部分、ウワバミがえじきをのみこんだあと、「もう動けなくなって、半年のあいだ、ねむっているが、そのあいだに、のみこんだけものが、腹のなかでこなれるのである」という部分に、語り手がより強い衝撃を受けたことをあきらかにする。その絵は、けものをのみこもうとしているウワバミの絵とはちがって、一見なんの残酷さも感じられない。しかし、実際は、そのあいだにもウワバミの腹のなかでは、のみこまれた動物がじょじょにこなされてゆくのであり、考えようによってはこちらのほうがもっと残酷なことであるかもしれない。しかも語り手のかいた絵では、のみこまれる動物は、トラのようなけものではなく、身体は大きいが性質のおとなしいゾウである。語り手はウワバミとゾウをくみあわせることによって、弱肉強食の残酷さをよりいっそう強調したものと思われる。

したがってこの絵は、語り手にとってはとてもこわい絵である。語り手はその絵をおとなたちに見せて「これなに？」というふうには聞いていない。「これ、こわくない？」と聞いている。大人たちはその絵をぼうしと見て「ぼうしがなんでこわいものか」と答える。それではと思って、ウワバミのなかみを書くが、おとなたちはその絵のこわさを理解しようともせず、ただ子どもの気紛れくらいにしかとりあわない。

ところが、王子さまはひと目見て、その絵のこわさを理解した。それは、この絵のもつ意味を理解する素地が、あらかじめ王子さまのなかにあったからだといえる。この世界には善意とか優しさだけではどうにもならないことがあるといったことにたいする感受性が、王子さまのなかにはあったということになる。事実、のちに、王子さまは花のとげの話をもちだして、語り手のいいかげんな返事に激怒して、「花がヒツジにくわれることなんか、たいしたことじゃないっていの？」と叫んでいる。なんの罪もない花がヒツジに食われることは、なんの罪もないゾウがウワバミに食われるのと同じである。ここでの王子さまの発想は、ウワバミの絵をかいたときの語り手の発想と同じであり、王子さまは、自分の星のバラの花をとおして、語り手と同じようなものの見方にすでに

達していたと言えるだろう。

2 バラの花

いずれにせよ、このようにして語り手は王子さまと知りあいになる。その後、王子さまのちょっとしたことばなどから、しだいにいろんなことがわかってくる。王子さまの星がやっと家くらいの大きさの星で、その星にはバオブブという植物の種があり、これはそのままにほうっておくと、しまいには星を破裂させることにもなりかねないので、小さいうちに抜きとらねばならない、といったことを語り手は知ようになる。王子さまがヒツジの絵をほしがったのは、ヒツジにバオブブの芽を食べさせようと思つてのことであつた。

王子さまと語り手が知りあつてから五日めのこと、王子さまはだしぬけにヒツジは花も食べるのかとたずねる。ヒツジはなんでも食べると語り手が答えると、王子さまは、トゲのある花も食べるのかとさらにたずねる。語り手がそうだと答えると、今度は、それじゃ「トゲは、いったい、なんの役にたつの」かと問ひたす。語り手はそのとき飛行機の修理のことで頭がいっぱひだったので、その問いにいいかげんに答える。そこで王子さまは、語り手のことを「まるでおとなみたいな口のききようをする人だな」と言つて怒りを爆発させ、とうとう泣きだしてしまう。

この場合、王子さまのいう「花」の背後には具体的なひとつの花、王子さまが自分の星に残してきたバラの花のことがある。王子さまはその花の美しさにひかれ、いろいろと世話をした花である。王子さまはこのバラの花を愛していたが、バラの花は王子さまの心に素直にこたえようとせず、王子さまを困らせてばかりいた。そういうこともあつて、王子さまは「もう、二度と帰つてこないつもり」で旅に出たのである。しかしながら、旅のあいだにいろんなことを学び、今ではバラの花にたいする責任をはたすため、再び自分の星に帰ろうと思つている。そしていっしょにヒツジを連れて帰つて、バオブブの芽を食べてもらおうと思つている。しかし、そのヒツジがバラの花も食べてしまうことにならば大変なことになる。ただヒツジは花を食べるといっても、トゲのあ

る花は別だということであればなんの問題もない。ところが語り手はトゲのある花もヒツジは食べるという。バラの花は「トゲを自分たちの、おそろしい武器だと思ってる」のに、そのトゲがなんの役にもたたないなら、バラの花はおそろしく危険な状況におかれていることになる。だから王子さまは、必死になって、トゲはなんの役にたつのかと語り手に問いかける。ところが、語り手は、修理のことが頭にひっかかっていたのでいいかげんな答えをする。語り手はウバミにのみこまれるゾウの悲劇がわかる人間であった。王子さまは当然語り手もヒツジに食われる花の悲劇の重大さはわかってくれるだろうと思っていた。ところがそうではなかった。王子さまは、語り手の予想もしなかったことばにあっけにとられてしまう。信じられないという気持ちであっただろうし、これならいわゆるおとなとかわらないじゃないかという気持ちだっただろうと思われる。どうしてわかってくれないのか、というよりむしろ、どうしてわかってくれないのかという気持ちでいっぱいになって、王子さまは語り手に怒りをぶちまける。

一方、語り手の方は、王子を傷つけるつもりはすこしもなかった。飛行機の修理のことで頭がいっぱいだったし、王子さまのヒツジや花やトゲの話も、それほど重大な話だとは思ってもいなかった。ところが王子さまの怒りや涙を見て、王子さまの言っていることがなにかとてつもなく重大なことなのだろうということがわかった。おそらく自分にとっての飛行機の修理以上に重大なことなのだろうと察しがついた。⁽³⁾ そんな重大なことに、自分がいいかげんな返事をして、それを理解しようとつとめることもしなかったのを後悔し、反省し、どうしてつぐないをすればよいかわからなかった。

ただ、この時点では、語り手はまだバラの花の話を聞いていなかったのも、王子さまにどう答えてよいか皆目見当がつかなかった。王子さまと同じ気持ちになって、ヒツジや花やトゲのことを考え直そうと思っても、王子さまは泣いてしまっていて、もはやなにも言えない状態だった。

3 王子さまの旅の目的

このようなことがあってから、語り手は王子さまのバラの花についてくわしく知ることになる。そしてこのバラの花とのいざこざが原因で、王子さまが旅立つにいったということも知る。ところで、王子さまが旅に出た理由はただこれだけではないように思われる。王子さまがはじめて地球にやってきたとき、砂漠でへビに出会う。このへビの「なにしにここにきたの？」という問いに、王子さまは「ばく、ある花といざこざがあってね」と答えている。だから、バラの花とのことが旅に出た大きな原因であることはたしかである。王子さまはバラの花を愛していたが、その本心が見ぬけず、ほんとうはバラの花も王子さまを愛していたのに、かえってきらわれていると考え、バラの花の気紛れにふりまわされて、失意の結果、別の星に新たな友達を求めて旅立った、ということとはたしかに言えるだろう。しかし、それだけですべて説明がつくわけではない。

王子さまは悲しいときよく入り日をながめたと語り手にあかしている。「ばく、いつか、日の入りを43度も見たっけ」とも言っている。1日に43度も入り日をながめるほどなぜ王子さまは悲しかったのか。これもバラの花とのことで苦しんでいたためだと解釈することはできる。しかし、バラの花が自分の星に咲く以前から、王子さまはよく入り日をながめていたという解釈もなりたつ。そのあたりのところは次のように書かれている。

王子さま、あなたは、はればれしない日々を送ってこられたようだが、ばくには、そのわけが、だんだんとわかってきました。ながいこと、あなたの気が晴れるのは、しずかな入り日のころだけだったのですね。

「ながいこと」ということばをどう解釈するかが問題である。バラの花とのいざこざ以前までも含むものかどうかということであるが、あとに述べる別の例証からいっても、ここはそれ以前からと解釈するのが妥当だろう。そう解釈すると、王子さまの悲しみは、もっと根の深いものであり、王子さまの旅立ち

に、その悲しみも当然関係があったと考えることができるだろう。

王子さまの悲しみについて、まず、すぐに思いつくのは、ひとりぼっちのさびしさである。ひとりぼっちであった王子さまのもとに、ある日バラの花が咲く。王子さまはいろいろと世話をしてあげるが、どうも心がかよいあわない。これでひとりぼっちのさびしさから抜けでられと思ったのに、よけい孤独を感じることになる。そこでほんとうに心のかよいあう相手を求めて旅に出る、というふうに、つじつまはあっている。

しかし、それだけではないように思われる。生活のなにかしら空虚感とか、自分にはなにかが欠けているといった不充足感、王子さまの悲しみは、そういったものからもきているのではないだろうか。事実、旅立つ以前の王子さまは、なにか不安定で、自分に確信がもてないといった感じを受ける。それはバラの花にたいする王子さまのなにか自信なげな態度に端的に表れているだろう。

そこから、自分に欠けているものをさがしに、これだと思えるものを見つければ、自分が何者であるかを発見しに、王子さまは旅立ったという解釈も成り立つ。バラの花とのいざこざは、そういう自分の心に以前からあったもやもやははっきり意識させる契機となり、ひいては、旅立ちを決意させる契機となったと解釈すれば、矛盾なく説明がつく。つまり王子さまの旅立ちの直接の原因は、バラの花とのいざこざであったが、そのいざこざは以前からあった王子さまのなにかしら心の空虚感や不充足感をはっきりさせる契機となり、むしろ旅立ちのほんとうの理由は、こちらのほうにこそあったのではないかと思えるのである。

したがって王子さまの旅は、友だちを見つけるための旅であると同時に、なにか確固としたものを見つけるためのひとつの武者修業の旅でもあったと考えることができる。王子さまが自分の星を去って星めぐりの旅に出たとき、次のようなことばがでてくる。

王子さまは、星の見物をはじめました。なにか仕事をさせてもらって、勉強しようというのでした。

なにか仕事をしたり、なにかを学んだりということが、旅の大きな目的のひ

とつであることが、このことばからもわかるだろう。

さらに、地球でキツネと出会ったとき、キツネの「なんなら…おれと仲よくしておくれよ（おれを飼いならしておくれよ）」ということばにたいし、「ぼく、とても仲よくなりたいんだよ（ぼく、そうしたいんだよ）。だけど、ぼく、あんまりひまがないんだ。友だちも見つけなけりゃならないし、それに、知らなければならぬことが、たくさんあるんでねえ」と答えている。王子さま自身の口から旅の2つの大きな目的が語られている。つまり、友だちを見つけるということと、いろんなことを知るということである。なにか仕事をしたり、なにかを学んだり、いろんなことを知るといったことは、すべて武者修業的な旅の主要な目的であるだろう。

4 星めぐりの旅

こうして王子さまは星めぐりの旅に出る。地球にくるまで6つの星をめぐり、そのそれぞれの星には、こうなるべきではない人間の見本のような人物がひとりずつ住んでいる。第1の星の「王さま」は、自分以外の人間はすべて「家来」とみなし、ありもしない権力を自分がもっているように思いこんで、それに自己満足している人間である。2番目の星の「うぬばれ男」は、自分をすぐれた人間、みんなから感心される人間と思いたい人間で、自分のすばらしさに自己満足し、自己陶醉している。しかしその実、ほんとうに感心されるようなものはなにももたない人間である。次の星の「呑み助」は、なぜ酒をのむのかとたずねられて、のむのが恥ずかしいのを忘れるためにのむと答える。自分を積極的に変えていこうという意志がみられず、自分の弱さを肯定し、あわれんで、逆にそこに居直っているような人間である。4番目の星の「実業屋」は忙しそうに自分の所有する星の数を数えている。この実業屋にとっては、所有するということだけが重要である。なにかをするための手段として所有するのではなく、所有するために所有するのであり、所有するということが唯一の目的である。5番目の星の点燈夫は、星の回転がしだいに早くなっているため、今では1分間に1度街燈に火をつけたり消したりしている。王子さまは、この点

燈夫とだけは友だちになってもよいと思う。というのも、これまでの王さまも、うぬばれ男も、呑み助も実業屋も、すべて自分中心的な人間であったが、点燈夫だけが自分を犠牲にして、自分以外の人間に奉仕している人間であったから。しかしながら、点燈夫もまた、結局は、他の星の住民と同じくへんなおとなであることにはかわりがないだろう。昔はりくつにあってしたが、今ではりくつにあわない命令に絶対的に服従している点燈夫は、現実には柔軟に対処してゆくことができず、いったんこうと思ったことに固執し、こりかたまっている人間のようにもみえる。さらに言えば、自己中心的な他の星の住民たちとは逆に、点燈夫はあまりにも自分がなさすぎる、自分以外のものに支配されすぎている。6番目の星の「地理学者」は、自分では動かずに、探検家の報告を受けて、それをノートにとって、その報告が証拠によってうらづけられたら、はじめてインキ書きするといった人間で、自分の身体を使ってほんとうに自分の体験から手にいれた知識や知恵よりも、他人を介して手にいれた知識や情報のほうをたいせつにする人間、たえず流動している生きたものには無関心で、死んだ事物の知識をありがたがる人間である。

王子さまは、この地理学者の言った「はかない」ということばの意味をとおして、自分の星に残してきたバラの花が、いつかは消えてなくなるものであるということを知る。また、地球が「なかなか評判のいい星」で、訪れるに値する星だということも教えてもらう。

5 キツネの教え

こうして王子さまは地球にやって来る。そして、まず砂漠でヘビに会う。ヘビは謎めいたことばで自分のもっている毒のことをほのめかしながら、もし王子さまがいつか自分の星に帰りたくなったら、助けてやると約束する。

ヘビとわかれて、人間たちをさがしに王子さまは砂漠をよこぎり、高い山にのぼってみるが、だれも見つからない。さらに歩いていくと、バラの花の咲きそろっている庭に出る。自分の星のバラの花をこの世にひとつしかない花だと思っていた王子さまは、庭一面に咲いている5千ものバラの花を見て驚いてし

まう。この世にひとつしかないバラの花を自分は持っており、そのどこにもない花の美しさにひかれて自分はその花を愛したのだと思っていた王子さまにとって、庭一面に咲いている5千ものバラの花は、そうした王子さまの思いこみを台なしにするものだった。自分はありふれたバラの花をたったひとつ持っているにすぎなかったことに気がついて、失望のあまり王子さまは泣きだしてしまう。それとともに、バラの花のことだけではなく、ほかにもいろんな思いこみや幻想にとらえられていたのではないかという反省がおこる。そのような新たな目で見ると、自分はしょせん、ありふれたバラの花ひとつと、小さな3つの火山しか持たない貧しくちっぽけな王子でしかないということに思いいたる。自分はそれ以上のものと思っていた王子さまは、自分に幻滅し、失望する。それもまた王子さまが泣いた理由であるだろう。

ここで、王子さまがそれまでもっていたふるい価値観が崩壊する。それにかわる価値観はまだ見出されていないので、王子さまは今、支えを失った状態、精神的に混乱した状態にある。その精神的な混乱を救い、新たな物の見方を王子さまに教えるのがキツネである。

キツネはまず、王子さまに「飼いならす」ということを教える。それは「絆をつくる⁽⁴⁾」ということで、いったん絆が結ばれると、相手はこの世でたったひとりのかけがえのないものになる。それだけではなく、相手と関連のあるものすべてが、今までとは別なふうに見えてくる。キツネはこう言ったあと「なんなら…おれと仲よくしておくれよ（おれを飼いならしておくれよ）」と言う。それにたいして、王子さまは「ぼく、とても仲よくなりたいんだよ（ぼく、そうしたいんだよ）。だけど、ぼく、あんまりひまがないんだ。友だちも見つけなけりゃならないし、それに、知らなけりゃならないことが、たくさんあるんでねえ」と答える。それを聞いて、キツネは「じぶんのものにしてしまったことでなけりゃ（飼いならしてしまったことでなけりゃ）、なんにもわかりゃしないよ」と言う。

キツネは王子さまのことばかり、王子さまが、友だちとはなにか、知るとはどういうことか、またそれらと時間の関係について、よくわかっていないということに気づく。そこで、その3つの関係を王子さまに解き明かすことになる。

まず、あるものごと、ある人間をほんとうに知ろうと思えば、そのものごと、その人間を飼いならすことが必要であるということを教える。つまり、友だちを見つけるということと、知るということは別の2つのことがらではなく、ひとつに結びあったものであるということを教える。そして、なにかを飼いならすためには、そのための時間が必要であるということも教える。この時間の価値を無視してできあいのものばかり買おうとするような人間は、したがって「なにもわかるひまがない」ということになる。友だちは時間をかけて飼いならしあってはじめてできるものであるから、できあいのものを尊ぶ人間には、友だちなど持てないということになる。

「友だち」「知ること」「時間」、この3つは密接に関連し、結びあっているということをキツネは教える。だから王子さまが友だちを見つけないといふのなら、また、なにかを知りたいといふのなら、時間をかけて自分を飼いならすようキツネは王子さまにすすめるのである。

キツネはまた「きまり」⁽⁵⁾のたいせつさということも教える。きまりとは、ひとつの日、ひとつの時間を特別なものにするとりきめのようなものである。もしそのようなとりきめがなく、どの1日、どの時間も、他の1日、他の時間とかわるところがなければ、生きるということは無限に続く単調な悪循環にすぎなくなる。もし毎日が平日ばかりであったなら、日々の緊張と息苦しさで人はとても生きてはいけなくなるだろうし、もし毎日が祭日であれば、祭日の喜びもなく、その単調さにしまいにあきあきしてくるだろう。平日があり、祭日があるからこそ、人は祭日を喜び、待ち望むことにもなる。

「きまり」（祭式、典礼、ならわし）は時間のなかにひとつの秩序を構築し、一様な時間を色づけし、意味づけする。生活に味わいやうるおいをもたらし、生きることの意味や方向性を与える。サン＝テグジュペリは『城砦』のなかで言っている。「祭式が時間のなかで行うことは、住まいが空間のなかで行うことと同じである。なぜなら、過ぎゆく時間が、ひとにぎりの砂のように、私たちを失わせるのではなく、私たちを実現させてゆくようにみえることはよいことだからである。時間がひとつの建造物となることはよいことである。こうして私は、祭典から祭典へ、記念祭から記念祭へ、ぶどうの収穫から次の収穫へと

歩んでゆく。あたかも、子供の頃、あらゆる足どりに意味のあった父の奥深い宮殿のなかを、会議の部屋から休息の部屋へと歩きまわったように⁽⁶⁾」。また、別のところで、「慣習や祭式や遊戯の規則の本質とは、それらが人生に与える味わいにあり、それらが創造する人生の意味にあるのだ⁽⁷⁾」とも言っている。

きまりは、飼いならすということが空間のなかで行うことを、時間のなかで行うものと言える。飼いならすことによって、あるもの、ある人間が、他の無数のもの、他の無数の人間とはちがった特別なものとなり、その飼いならされたものや人間に関連するあらゆることがらが、特別な意味をおび、今までとはちがった目で見えるようになる。飼いならしたものをとおして、人は生きることの喜びや意味や方向性を見出し、生活を豊かにすることができる。それと同様に、きまりは、ある1日、ある時間を、他の無数の日や時間とちがった特別なものにし、時間のなかにひとつの面ざしをもたらせ、生きることの喜びや意味や方向性を与え、生活を豊かにする。

キツネと王子さまは、こうして飼いならしあうことによって友だちになるが、わかれのときになって、キツネは「もう1度、バラの花を見に」行くことを王子さまにすすめる。そうして、王子さまは、自分の星のバラの花がこの世にひとつしかないということを理解する。

王子さまのバラの花は、地球の庭に咲く5千ものバラの花と見かけは少しも変わらない。1度はそのために失望し泣いてしまったが、キツネと出会い、飼いならすということのたいせつさを教えてもらい、実際、キツネと飼いならしあい、飼いならすということのことをことばのうえだけでなく、実際の経験のうえでも理解することになった王子さまは、今までとはちがった目でものごとが見えるようになった。キツネと仲よくなり、友だちになることによって、そのキツネが他の10万ものキツネとちがったものになったように、王子さまのバラの花も、王子さまがいろいろと世話をし、不平や自慢話も聞いてやったりしたことで、かけがえのない花になったのだということを理解する。

戻ってきた王子さまに、キツネは「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない」「かんじんなことは目に見えない」という秘密を教える。友だちになったキツネや、いろいろと世話をし、話を聞いてやったバラの花は、見かけは他のキ

ツネやバラの花とすこしも変わらない。しかし王子さまにはそのキツネやバラがこの世にひとつしかないかけがえのないものとして目に映る。それは飼いならしあい、仲よくなることによって、キツネやバラの心がわかるようになったからであり、キツネやバラの心の世界を識ることができるようになったからである。仲よくなったキツネやバラを見ると、王子さまは同時にかれらの気心や関心や興味や考え方といったものも含めて見ていることになる。そのような目で見ると、かれらのちょっとしたしぐさやことばもよくわかるようになる。心で見るとは、そのような、表面を見ただけではわからない、対象の奥行きのある広がりすべてを見るということである。そして心で見える目を養うためには、飼いならすという手続きを踏まなければならない。結局、飼いならしてしまったことでなければなにもわからないという、以前のキツネのことばとつながってくるのである。

キツネはさらに、飼いならしたものにはいつまでも責任がある、王子さまはバラの花に責任があると言う。長い時間をかけて築きあげた絆は、人間にとってひじょうにたいせつなものであるというのである。⁽⁸⁾ここで王子さまは、はっきりと再び自分の星に戻ることに決心したものと思われる。

次の転轍手の話のなかで、王子さまは「子どもたちだけが、なにがほしいか、わかっている」と言っている。一方、おとなたちは、自分がなにがほしいのかわからずに、むやみやたらと動きまわっている。この作品のなかに語られているいわゆるおとなたちは、ものごとの表面しか見ようとしないうし、またそれしか見えない。おとなたちが好む数字は、ものごとの表面のことにしか関係しない。おとなたちはものごとの内面に目を向けようとしないうし、他の人間の心のなかにある「かんじんかなめのこと」には目を向けようとしないうし。言いかえれば、なにも飼いならすことによつて世界が変わり、豊かになり、喜びやしあわせを感じるということがない。したがつておとなたちの心は貧しく、豊かさに飢えている。この心の貧しさを埋めあわせ、飢餓感をいやそうといろいろやつてはみるが、心の飢餓感はずのるばかりである。王さまは権力によつて、うぬばれ男はうぬばれによつて、呑み助は酒によつて、実業屋は星を所有することによ

って、点燈夫は任務をはたすことによって、地理学者は知的權威によって、それぞれ心の飢餓感をまぎらそうとするが、こうしたことはすべて本当の解決にはならないのでうまくいくはずがなく、ますますそれにのめりこむことになる。あげくのはては、自分たちがなにを求めているのかもわからなくなり、不満足の気持ちにかりたてられて、むやみやたらと場所を変えろということにもなる。王子さまは別のところで、地球に住む人たちは自分たちがなにをさがしているのかわからずにいる、しかし「さがしてるものは、たったひとつのバラの花のなかにだって、少しの水にだってある」と言っている。つまり、心でさがせば、たったひとつのあたりまえのバラの花や水にも、さがしているものは見つかるはずだというのである。そして、この転轍手の話のなかの「子どもたち」はすでにそれを見つけている。子どもたちはばろきれでできた人形のために時間をつぶし、飼いならすことによって、自分と人形を中心とした奥行きのある世界を築いて、そのなかで生き生きと生き、喜びを見出し、幸福を感じている。おとなたちもこのような心の豊かさを、喜びを、幸福をもとめているはずなのに、それを手にいれるにはどうすればよいかかわかっていない。飼いならすということに問題のカギがあるということに気づいていないのである。

次の丸薬商人の話も、すでに飼いならすということがものごとの根本であるということを知った王子さまの心が読みとれる。飼いならすというのは時間をかけることを前提としている。時間をかけなければなにも手にいれることができない。王子さまがバラの花をたいせつに思っているのは、王子さまがそのバラの花のために時間をむだにしたからだときツネは教えている。逆に言えば、あるもののために時間をむだにし、時間をかけたからこそ、それが自分にとって貴重なものとなり、かけがえのないものとなる。それと同じように、渴きをいやすために、時間をかけ、苦勞して泉にたどりつき、やっと水が飲めるとすれば、その水はかけがえのない貴重な水となる。それを手に入れるための時間や苦勞が、その水の価値を高くする。また渴きの苦しみが強ければ強いほど、泉にたどりついたときの喜びも大きくなる。時間を儉約するために、薬ですぐに渴きをなおしてしまえば、かけがえのない貴重な水との出会いもなく、苦勞して泉にたどりついたときの喜びも味わえない。それに儉約した時間を使って

なにかしたいことがあるのかどうかも疑問である。時間を節約することばかり考えていれば、たいせつなものはなにも手にいれることができない。むしろ時間をかけ苦勞することによって、人はたいせつなものを見つけることができるのである。「ばくがもし、53分っていう時間をすきに使えるんだったら、どこかの泉のほうへ、ゆっくり歩いてゆくんだがなあ」と王子さまが思ったのは、このような理由からであるだろう。

6 心のための水

丸薬商人の話を聞きながら、語り手は最後に残っていた水を飲みつくす。飛行機の修繕はまだ終わっていない。そこで「のどがかわいて死にそうだ」と言う。それにたいして王子さまは「死にそうになっても、ひとりでも友だちがいるのは(たとえ死ぬことになっても、ひとりでも友だちを得たことは)、いいものだよ」とかみあわないことを言う。王子さまははじめ語り手の追いつめられた気持ちを察することができなかった。それでこんなことを言ったのだが、このことば自体、王子さまの本心から出たことばで、この時点で王子さまはすでに死をかけて自分の星のバラの花への責任をはたすつもりでいた。王子さまのことばのうらには当然そういう思いがあった。しかし、語り手はもちろんそこまで読みとることはできない。ただ王子さまのかみあわないことばに失望しただけである。思えば、王子さまはのどの渇きや空腹に苦しむということはなかったのだし、これ以上なにを言っても、自分の苦しみはわかってもらえない。そこで返すことばもなかった。王子さまはそれを見て、語り手にとって水がどれほどたいせつなものか、語り手が今どれほどせっぱつまった状態におちいているか、自分にはわかっていなかったことに気づき、反省する。そして自分ものどが渇いているから、井戸をさがしに行こうと申し出る⁽⁹⁾。

語り手は「こんな果てしない砂漠の中で、いきあたりばったり井戸をさがすなんて、ばかげたことだと思った」が、それでも井戸をさがしに歩き出す。のどが渇いたことのない王子さまが、語り手の気持ちを察し、せっぱつまった状況を思いやっての申し出であったので、語り手は、王子さまのその気持ちを無

にしないために、いっしょに井戸をさがしに歩き出したのである。相手を本当に理解しようとして、相手の立場に立って同じ方向からものを見ようとした王子さまに、自分も同じように相手の立場に立って同じ方向からものを見ようとした。

井戸を求めての2人のこの歩みは、2人の友情のクライ・マックスを構成する。途中、王子さまは「星があんなに美しいのも、目に見えない花があるからなんだよ」と語る。このことばは「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない」「かんじんなことは、目に見えない」というキツネの教えにつながるものである。しかしながら、ここでは、すでに述べた飼いならすことによって対象の奥行きのある広がりofのすべてを読みとるといったこととは、すこし次元がちがっている。ここで問題なのは、飼いならすことがもたらすもうひとつの重要な変化である。すでにキツネは、王子さまが自分を飼いならせば、麦ばたけがすばらしいものになるだろうと言っていた。それが王子さまの金色の髪を思い出させるからである。飼いならすことは、相手をかけがえのない存在に変えるだけではない。相手に関連するものすべてを変容させ、特別な意味をおびさせるのである。

王子さまはさらに「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ」と言う。語り手は、「とつぜん、ぼくは、砂がそんなふうに、ふしぎに光るわけがわかっておどろきました。ほんの子どもだったころ、ぼくは、ある古い家に住んでいたのですが、その家には、なにか宝が埋められているという、いつたえがありました。もちろん、だれもまだ、その宝を発見したこともありませんし、それをさがそうとした人もいないようです。でも、家じゅうが、その宝で、美しい魔法にかかっているようでした。ぼくの家は、そのおくに、ひとつの秘密をかくしていたのです」と、子ども時代に思いをはせ、「そうだよ、家でも星でも砂漠でも、その美しいところは、目に見えないのさ」と王子さまに答える。星は花のせいで、砂漠は井戸のせいで、家は宝のせいで美しい。花、井戸、宝は、それぞれ星、砂漠、家を内から美しく輝かせる光源のようなものである。花、井戸、宝、この3つのものに共通するのは、それらが愛の対象、渴望の対象であり、生活のひとつの目的を構成し、人間の愛や渴望をひき寄せ

るひとつの中心を構成するということにあるだろう。

『人間の大地』の「砂漠のなかで」の章で、サン＝テグジュペリは「人間の帝国は内面にある」、「サハラ砂漠、それが姿をあらわすのはわたしたちの内面だ⁽¹⁰⁾」と述べて、砂漠の真の生活は、部族の移動といった単なる外面的、表面的な生活のなかにあるのではなく、砂漠に生きる人それぞれが、その信仰や信念や渴望にのっとって演じる内面のドラマにこそあると言っている。砂漠に生きる人たちは、自分たちの渴望をいやしてくれるなにかを中心として、ひとつの宗教、ひとつの内面の帝国を築きあげ、それに帰依して生きている。そのような生活こそ砂漠の真の生活であるというのである。それは砂漠の住民だけにかぎられるものではない。人間の真の生活もまた、そのようなひとつの中心、ひとつの目的のもとに秩序立てられた内面のドラマのなかにあると言えるだろう。そのようなドラマを生きる人間は、『星の王子さま』に登場するいわゆるおとなたちとはちがって、すでに自分の求めているものを見出し、自分の生を確固とした基盤の上に据えている。生きる喜びや意味や方向性をすでに見出している。そのような人間の見る世界は、内面の愛や渴望や信仰や信念によって変容されている。それは心で見なければ見えない世界である。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない」「かんじんなことは、目に見えない」ということばは、そうした内面の磁力によって変容された世界こそ、人間にとってたいせつなものであり、そこにこそ生の充実、生の幸福を解くカギがあるということをも意味するだろう。

いずれにせよ、このような対話をとおして、キツネの教えは王子さまを介し、語り手の心にまで伝授されるにいたる。そして、とうとう夜明けに井戸を発見する。とはいえ、その井戸は砂漠にある井戸というよりも、村にあるような井戸で、車もつるべも網も用意されている。「あたりには、村なんか、ひとつもありません。ぼくは夢を見ている気持ちでした」と語り手が言っているように、このあたりの場面は、夢とも現実とも言いがたいふしぎな雰囲気をかもしだしている。重要なのは、そのような井戸がありうるかどうかというよりも、この井戸が2人の友情の証としてあるということであり、2人の友情の高まりの頂点におかれた井戸であるということであるだろう。

のどの渇きに悩まされることのない王子さまは、語り手にたいする友情から井戸をさがそうと申し出た。語り手もまた、王子さまのそのような気持ちを察して、王子さまへの友情からいっしょに井戸をさがしに歩き出した。2人ともはやのどの渇きをいやすために水をさがしていたのではなかった。2人がさがしていた水は、むしろ心のための水、友情のための水であった。そこで2人が飲んだ水は、ともにした苦労と友情ゆえに、「たべものとは、べつなもの」であり、「なにかおくりものでも受けるように、しみじみとうれしい水」であったのである。

7 王子さまの死

友だちも見つけたし、飼いならすということや心で見るということも学んだ王子さまは、もはや旅の目的を達成したといえる。旅立つ以前の王子さまの、あの頼りなげな不安定さはもはや見られない。今では確固とした基盤のうえに自分を据えて生きてゆくことができるだろう。もはや心の迷いはない。バラの花がわかれのときに思わずもらした涙は、まぎれもない愛の証であった。⁽¹¹⁾語り手の飛行機の修理も無事完了し、もうこれで思い残すこともない。あとは、バラの花への責任をはたすため、自分の星に帰るだけである。語り手とのわかれの場面で、王子さまは自分がどうしても去ってゆかねばならない理由を次のように言っている。

ねえ…ぼくの花…ぼく、あの花にしてやらなくちゃならないことがあるんだ(あの花に責任があるんだ)。ほんとに弱い花なんだよ。身のまもりといったら、4つのちっぽけなトゲしか、もっていない花なんだよ…

語り手とのわかれもつらいにはちがいないが、語り手にとって、王子さまがぜひとも必要な存在であるというわけではない。語り手には飛行士という職業もあるし、生きてかえればよろこんでくれる友人たちもいるだろう。しかし、バラの花は、身のまもりといえど4つのトゲしかない弱い存在であり、しかも

今では、ちっぽけな星にひとりぼっちにされているのである。塚崎氏が言うように、地理学者によって、花ははかないものだを知ったときから、王子さまは、バラの花をひとりぼっちに残してきたことを後悔するようになっていただろう。⁽¹³⁾それは次のことばからもあきらかである。

ぼくは、あの花のおかげで、いいにおいにつつまれていた。明るい光の中にいた。だから、ぼくは、どんなことになっても、花から逃げだしたりしちゃいけなかったんだ。

王子さまは、その当時、バラの花の心が読みとれなかったし、自分の心さえしきとはつかみきれなかった。しかし、心で見える目を養った今はちがう。これからはバラの花と、新たなゆるぎない関係、新たな生活を築きあげることができだろう。おそらくバラの花自身も、ひそかにそれを待ち望んでいるはずである。その心にこたえなければならない。

こうして、王子さまは、ヘビとの約束通り、ヘビの毒の力を借りて、自分の星に帰ってゆく。とはいえ、ほんとうに自分の星に帰ったかどうかはさだかではない。翌日王子さまのからだが見つからなかったので、王子さまは自分の星に帰ったのだと語り手は言っているが、これも推測の域を出ない。いずれにせよ、王子さまがはたして自分の星に帰りついたかどうかは、この場合たいして重要なことではない。重要なのは、バラの花のもとへ戻るために、王子さまが死という手段を選んだということである。

キツネにすすめられて庭に咲くバラを見に行ったとき、王子さまは5千ものバラの花に「あんたたちのためには、死ぬ気になんかなれないよ」と言っている。これは「逆にいえば、飼いならした王子のバラのためには、死ぬ気になれるということである。」⁽¹⁴⁾

では、死以外の手段で自分の星に帰ることはできなかったのか。たとえば、自分の星を出たときのように、渡り鳥の利用といった手段も考えられる。しかしながら、物語はまさに、死以外の手段などありえないかのように進められる。これは、結局、作者自身の意図からきたものであるだろう。つまり、王子さま

をこのような形で死なせることによって、サン＝テグジュペリは責任という観念と死とを結びつけようとしたのである。飼いならした相手には、たとえ死をかけても責任をはたさなければならない。サン＝テグジュペリの責任ということばは、それほど重いことばである。

(註)

- (1) サン＝テグジュペリ『星の王子さま』、内藤濯訳、岩波少年文庫、1953年、p.159
- (2) 塚崎幹夫『星の王子さまの世界』、中公新書、p.78
- (3) このときの語り手の心は次のように表現されている。「夜になっていました。ぼくは、しごと道具を手ばなしていました。カナヅチも、ボールトも、目にうつらなかつたし、のどがかわいても、死ぬ思いをしても(のどのかわきも、死ぬことも)、そんなことはどうでもよいことでした」。のどの渇きと、その必然的帰結である死におびやかされている語り手にとって、飛行機の修理の成功だけが、それからのがれ出られる道である。それは、語り手にはなにより重大なことである。ところが、語り手は、ここで王子さまの話の背後にあるものを、それ以上に重大なものと価値づけている。この場面は、語り手と王子さまの友情の最初の危機であり、もし語り手がそのような価値づけをせず、あくまで自分を通そうとしていれば、2人の友情はここで決裂していたかもしれない。語り手の王子さまへの歩み寄りによって、この危機は乗り越えられ、2人はよりいっそう接近することになる。
- (4) 内藤氏の翻訳では、「仲よくなる」と訳されている。
- (5) 「きまり」と訳されている«rite»には、「祭式、典礼、儀式、ならわし、慣習」といった意味がある。
- (6) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959, p.518
- (7) Antoine de Saint-Exupéry, *Un Sens à la Vie*, Gallimard, 1956, p. 43
- (8) 長い時間をかけて築きあげられた絆は、なにものにもまさる富であると、サン＝テグジュペリは『人間の大地』のなかで言っている。「事実、失われた仲間にかわりうるものはなにもない。古い友人は簡単につくり出せるものではない。多くの共通の思い出、ともに生きた多くの苦難の時間、多くの仲違い、和解、感動、こうした宝におよぶものはなにもない。こうした友情は再び築きあげられることはない。」(Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959, pp.157-158)。また、アンデス山脈に遭難したギヨメの奇蹟的な生還を語るくだりでは、何度となく死の安らぎという誘惑にかられながら、ギヨメがなおも死に屈することを拒んだのは、生きて還ることを信じ、また願っている妻

や僚友たちにたいする責任からであったと述べている。作者自身のリヴィア砂漠での遭難を語った「砂漠のただなかで」という章では、自分が死ぬことにはそれほど苦しみはおぼえないし、死を前にした苦しみさえ耐えがたいものではない。しかし、自分の死が、自分を待っていてくれる人たち、自分の生還を切に願っているだろう人たちをいわば見捨てることになるのが耐えられないと語っている。「悲壮なのは人間関係だけだ。私たちに責任ある人たちを安心させてやれない無力感だけだ。」(Ibid., pp. 224-225)

- (9) この場面は、語り手と王子さまの友情の第2の危機と言えるだろう。もし王子さまが語り手のせっぱつまった状況を理解しようとしなかったら、2人の友情にくばくかのひびが生じていたことだろう。第1の危機とは逆に、今度は王子さまの語り手への歩み寄りによってこの危機は乗り越えられる。
- (10) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959, p. 187
- (11) この作品では、飼いならしたもののとのわかれの場面で、かならず涙があらわれる。「泣くこと」«pleurer»は、あたかもわかれゆく2人のあいだに築かれた絆の強さの証拠であるかのように。「花がそういったのは、泣いている顔を、王子さまに見せなくなかったからでした」(王子さまとバラの花とのわかれ場面)。「王子さまはこんな話をしあっているうちに、キツネと仲よしになりました(キツネを飼いならしました)。だけれど、王子さまが、わかれていく時刻が近づくと、キツネがいいました。『ああ!…きっと、おれ、泣いちゃうよ!』(キツネとのわかれの場面)。「子どもたちだけが、なにがほしいか、わかってるんだね。きれいでできた人形なんかで、ひまつぶして、その人形を、とてもたいせつにしているんだ。もし、その人形をとりあげられたら、子どもたちは、泣くんだ」(飼いならした人形とのわかれ)。「仲のよいあいてができると(自分が飼いならされると)、ひとは、なにかしら泣きたくなるのかもしれませんが」(語り手と王子さまのわかれの場面)。
- (12) イヴ・ル・イールは、語り手の飛行機の故障したモーターを、語り手自身の精神の混乱ととり、その混乱(故障)のせいで、語り手は砂漠の乾燥(神の恩寵の枯渇)に苦しまなければならない。だが、その砂漠で井戸を発見し、その水(恩寵の復活)によって語り手の渇きはいやされると解釈している(Yves Le Hir,

Fantaisie et Mystique dans Le Petit Prince de Saint-Exupéry, Nizet, 1954, pp. 48-49)。イヴ・モナンも故障したモーターを、語り手の「感受性の喪失、くじかれた心」ととっている (Yves Monin, *L'Esotérisme du Petit Prince de Saint-Exupéry*, Nizet, 1989, p. 103)。たしかに、キツネと出会う前の王子さまと同様、語り手もまた、王子さまとの出会い以前は、人知れず孤独に悩み、心の充足を味わうということもなかった。砂漠におけるのどの渇きは、同時に心の渇きを象徴すると解釈することもできるだろう。この渇きは、最後に井戸の水によっていやされる。「水は、心にもいいものかもしれない」という王子さまのことばは、その意味で暗示的である。さらに、「その水は、たべものとは、べつなものでした」と、水が単なる物理的な次元のものだけではないことが強調されている。

この水を飲んだあと、語り手は「とてもだめだろうと思っていた」飛行機の修理に成功する。モーターの故障が、心の故障を象徴するとすれば、心にいい水によって心がいやされるとき、同時にモーターの故障が直るのもふしぎなことではない。修理の成功を知らせようとやってきた語り手がまだそれを口にしないうちに、「機械のいけなないところが（機械に欠けていたものが）見つかってよかったね」と、王子さまは言う。なぜかはわからないが、王子さまは、飛行機と語り手の心が連動していることを知っている。

いずれにせよ、語り手は王子さまとの友情によって心の再生をとげる。このうち、語り手は、飛行機のみならず、自分の心をもたたく操縦してゆけるだろう。

(13) 塚崎幹夫、前掲書、p.121

(14) 塚崎幹夫、前掲書、p.124